L2

「アクセン・タソル」：パプアニューギニアにおける手話言語使用を特定し記述する

サマンサ・ラーリック
（グリフィス大学［オーストラリア］）

要旨

パプアニューギニアは、言語的に世界一の多様性を持つ国として広く知られている。800 以上の言語があると言われ、それらの言語に関しては文法、辞書、類縁関係および記述といった研究が数多く刊行されてきた。しかしながら、これらの「800 の言語」の研究が対象としてきたのはほぼ例外なく音声言語である。本発表では、パプアニューギニアの手話言語を対象としてこれまで行われてきた研究を論じる。その一つは、パプアニューギニアの高地で用いられるシナシナ手話（SSSL）を対象として発表者が現在取り組んでいる記述研究である。ここで焦点となるのは、(1) パプアニューギニアの手話言語についてどのようなことが既知であるか、(2) これらの手話言語から何が学べるか、そして (3) なぜこれらの手話言語を特定し記述することが今まで困難であったか、である。(3) に関しては、この地域の手話言語を「アクセン・タソル」（単なる身振り）と見なす考えも関連している。

シナシナ手話は 2016 年に存在が確認された。ほかにパプアニューギニアで使用が確認されている手話言語や手話体系としては、パプアニューギニア手話、カリゲ手話、メヘク手話、そしてエンガ州で利用されている手話体系が知られている。音声言語の研究に比べると量的に遅れをとっているパプアニューギニアの手話研究であるが、その多くが類型論的に珍しい特徴を報告している。今後さらに手話言語の特定と記述が進めば、さらに多くの手話言語の存在が確認され、それを記述し分析することで手話言語の類型論に対する言語学者の理解が再形成されるかもしれない。音声言語どうしの類縁関係は、これまでパプア諸語研究の重大問題であった。シナシナ手話・パプアニューギニア手話・エンガ州手話・カリゲ手話を比較すると、これらの中には近い類縁関係を持ちながら完全に相互理解可能ではない言語がありそうである。さらなる比較研究がこの分野に貢献するであろう。また、比較研究によって (A) パプアニューギニアの人類史の理解が深められ、(B) ここで音声言語や手話言語を用いる人たちの歴史的関係が紐解かれるであろう。

最後に、発表者自身がシナシナ手話を特定し記述してきた経験から、類似した言語を特定し記述することへの困難について述べる。近年、道路網が整備され都市が発展してきたことから、パプアニューギニアの遠隔地に到達することなどの兵站面の課題は克服されつつある。軽量なビデオカメラとコンピュータが広く利用可能になったことで、シナシナ手話が用いられるケレ村などの場所でも手話言語の記述研究が容易になった。そのような兵站面の困難が減少する一方で、ろう者や手話使用者に対する否定的な姿勢は今なおパプアニューギニアで

支配的である。多くの場所で、手話言語の使用は「アクセン・タソル」（単なる身振り）として蔑まれ、コミュニティの構成員もそれが音声言語とは異なり記述するだけの価値がないものだと考えている。聴者である手話言語使用者も、自分が手話言語使用者であると明かしたがらず、知り合いのろう者を紹介することをためらうことがある。そこから、手話言語とその使用に対してある程度のスティグマや複雑な感情があることが窺える。そのような悪感情が、パプアニューギニアでの手話言語研究を困難なものにしているが、発表者によるシナシナ手話研究の事例が示すように、言語記述を続けながら当地におけるろう者の歴史を話し合っていくことで、そのような悪感情は軽減することができる。